

## 2014年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 文学部・教授・成田健一  
研究課題：精神的健康の測定と生涯発達的变化  
研究期間：2015年4月1日～2016年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

本研究では精神的健康の測定と生涯発達的变化を検討するための心理尺度の開発に資することを大きな目的としている。そのために、まずその現状を理解し概観的に捉えることを主目的として、文献検索を行った。もちろん精神的健康を捉えるための方法論は無数にある。また広義の精神的健康という観点からは、「精神的健康」「メンタル・ヘルス」などの用語以外にも、「適応」、「QOL」、「生命の質・生活の質」、「主観的幸福感」など様々な専門用語が関連し得る。結果として、精神的健康に関係する文献数は、極論すると無数にあることが予想された。このため、本研究では過去の諸研究を概観するために、以下の4つの制限をかけて文献検索を行った。

第一に、実証的研究論文に限った。実際の測定内容にそもそもの関心があるため、いわゆるレビュー論文はさておき、何らかの形で広義の精神的健康に関わる具体的データを収集する実証研究に焦点を当てた。もちろん書籍や報告書などで実証的研究を行っている事例も多数ある。しかしそれらの多くは、別途論文の形で公刊されることが多いため、ここでは実証的研究論文に限った。

第二に、わが国の学会誌に掲載された実証論文に限った。精神的健康の測定に関わる研究は世界中で広く行われている。当然ながら、それらも検索の対象となるべきだろう。ただし、本研究では、まず実際にわが国においてどのように測定されているのかを検討する必要がある、さらには大変に広い領域を含む精神的健康測定の問題を世界中に広げて検索すると、大量の文献の海に溺れてしまい、諸文献を概観することすら困難であると考え、まずはわが国の論文に限ることとした。また、学会誌の実証研究論文はいわゆる査読を受けており、その内容や記述の質の担保があると考えた。改めて言うまでもなく、学会誌以外に掲載された優れた論文も多く、一方で学会誌に掲載されても水準に達していないのではないかと疑われる論文も無いわけではない。しかしながら、その質の点で玉石混交であり得ることを避け一定水準にあることを客観的に保ち、かつ筆者の独断や偏見で論文の取捨選択を行うことを避けるため、学会誌に掲載されている論文である、という基準を採用した。

第三に、1980年以降に刊行された論文のタイトルを収集の対象とした。精神的健康の測定研究の近年の動向を知るためにも、ここ30年程度の研究の流れを追うことで、現状の理解が促進されると考え、1980年以降に限った。また、一般に論文タイトルは、論文要旨を最も集約した情報である。論文内容を最大限簡潔に表したものであり、論文著者が読者に最も伝えたい情報を含むものと考え、そのタイトルを対象として検索を行うことを試みた。

そして最後に精神的健康を広く捉えるためにここでは「自己」に関わる研究を検索することとした。筆者がこれまで主として行ってきた質問票による自己評価、自己評定尺度を捉えたい

という意図ももちろんあるが、「精神的健康」を広く心理学的に捉えようとする「自己」の問題を外すことはできないだろうと判断した。このため「自己」に関わる用語を持つ文献を収集することで、広義の「精神的健康」を捕捉できるのではないかと考えた。

これらの制限をかけた上で文献検索を実施したところ、1980年～2013年までの33年間においてわが国の学会誌に掲載された実証論文は約8000件となった。そしてこの中から、おおよそ1/8にあたる1000件程度の文献が「自己」に関わる論文であることが示された。これほど多くの論文の中身を丹念に紐解くことは極めて困難である。このため、メタ的な視点から、計量書誌学的方法でもってこれらの諸研究を客観的、定量的に整理することを試みた。その結果、成人・高齢者を対象とする研究は近年増加傾向にはあるものの相対的に少なく、全体の60%以上は大学生を対象として行われた研究であることが示された。さらには「自己」研究自体が極めて多様であり、当然かもしれないが必ずしも精神的健康の測定に特化して研究されているわけではないことなども示された。これらの結果の一部については、大学院生の里見香奈との共同で2015年9月に開催される日本心理学会第79回大会（於：名古屋国際会議場）にて発表を行う予定である。

こうした計量書誌学的研究と同時に、収集された諸研究の中から、生涯発達の研究を抽出し、それらを精神的健康という視点でまとめなおす作業も同時並行的に行った。その内容については「高齢者のパーソナリティ」という観点から再考し、2015年12月に刊行される日本老年精神医学会の学会誌「老年精神医学雑誌」に掲載される予定である。

これら文献調査を出発点に、さらに研究をすすめる、当初予定していた過去の実証データを再考し、心理尺度の開発に邁進するつもりであった。しかし文献数の多さが故に、計量書誌学的な分析に時間をとられ、既に収集していた過去の実証データの再検討は不十分なものとなり、結果として2014年度中には論文文化に至らなかった。この点は今後の大きな課題としたい。

最後に、筆者が関わってきた精神的健康の測定と生涯発達の変化に関わる実践的活動の一環として実施した学会報告に関して少しだけ触れておきたい。2014年9月に開催された日本老年行動科学会第17回東京大会（於：明治学院大学）において、日本老年行動科学会が中心となっておこなっている東日本大震災支援の報告の一部を筆者が行った。詳細について触れる紙幅は許されていないが、これは精神的健康の測定とその生涯発達のな変化に関わってくる実践的活動のひとつとして、重要な意味を持つ活動であると考えている。

研究成果概要は、データは [gakunai@kwansei.ac.jp](mailto:gakunai@kwansei.ac.jp) まで提出してください。